

主要登場人物

ラインハルト・フォン・ローエングラム

(Reinhard Herzog von Rohengram)

金髪と蒼水色の瞳を持つ貴公子。戦争の天才。銀河英雄伝説の主人公の一人。元帥。ローエングラム公爵。帝国軍最高司令官にして独裁者。

ジークフリート・キルヒアイス

(Siegfried Kirchais)

ラインハルトの腹心であり親友。ルビーを溶かして染めたような赤毛と感じの良い青い目の長身の若者。上級大将。戦場で決して逆上らない、智と勇を兼ねた帝国軍屈指の驍将。

アンネローゼ・フォン・グリューネワルト

(Annerose Gräfin von Grunewald)

ラインハルトの姉。一五歳の時、時の皇帝フリードリヒ四世の後宮に納められ、グリューネワルト伯爵夫人となる。そのフリードリヒ四世の死後、ラインハルトたちの許へ戻るが、その後、わけあってフロイデンへと隠棲する。

ヒルデガルト・フォン・マリーンドルフ

(Hildegard von Mariendorf/Frau in Mariendorf)

マリーンドルフ伯爵家の一人娘。伯爵令嬢マリーンドルフ。通称ヒルダ。短くした、くすんだ金色の髪とブルー・グリーンの生き生きした瞳の、美貌の少年を思わせる女性。帝国軍幕僚総監に任じられ、中佐待遇でラインハルトの遠征に同行する。

オスカー・フォン・ロイエンタール

(Oskar von Reuentah)

帝国軍上級大将。青い左目、黒い右目の金銀妖瞳の美男子。ミッターマイヤーと並んで『帝国軍の双璧』と称される名将。智と勇のバランスにおいては、ラインハルト、ミッターマイヤー、ヤンを凌ぎ、キルヒアイスに比肩すると評される。漁色家。

ヤン・ウエンリー

(Yang Weng-ii)

同盟軍大将。イゼルローン要塞司令官・兼・駐留艦隊司令官。原作通り、三二歳で元帥になり、同盟軍史上最年少の元帥となる。

フレデリカ・グリーンヒル

(Frederica Greenhill)

同盟軍大尉。知性と美貌を兼ね備えた、ヤンの副官。

ユリアン・ミンツ

(Julian Mintz)

トラバース法でヤンの養子になった、亜麻色の髪の、中々に端正な顔立ちの少年。ヤンの許で軍人を志し、本稿ではフェザーン駐在武官となっている。少尉。

ウランフ

(Uranff)

同盟軍中将。原作に反して、帝国領侵攻作戦時の惑星リューゲンでの戦いに生き残り、第一四、第一五艦隊の編成と訓練に当たると共に、ビュコックやヤンのよき相談相手になっている。現在は第一艦隊司令官。

アレクサンドル・ビュコック

(Alexander Buccok)

アムリッツア後、大将となり、同盟軍艦隊司令長官となる。同盟軍の宿将。原作通り元帥に昇進。

ヨブ・トリューニヒト

(Job Trünnicht)

同盟最凶の政治家。本場に最凶。

ウォルター・アイランズ

(Walter Islands)

ネグロポンティの跡を継いで、国防委員長となった人物。銀英伝の読者にはお馴染みの、五〇年間の情眠よりも半年の覚醒で後世に知られるようになった人物。優れた政治家としての資質は持っていた人なんだろうと思う。

ドーン

(Danson)

大将。同盟軍統帥本部長。ジャガイモ野郎で伍長。

アドリアン・ルビンスキー

(Adrian Rubinsky)

フェザーン自治領主。現在、帝国軍の搜索を避けて潜伏中。

ハイドリッヒ・ラング

(Heidrich Lang)

帝国内国安全保障局長。

クリストフ・ディッケル

(Christoff Dicke)

帝国から亡命し、苦学して士官学校を首席卒業した。トリューニヒトから青少年栄誉賞を受賞し、その後、統合作戦本部に入る。グレーチエンをリベンジするためフェザーンに潜入する。海鷹会なる組織に勧誘し、拒否される。

本編オリジナルキャラクター紹介

グレーチェン・ヘルクスハイム

(Gretchen Theresa Herxheim,
Margareta Therese von Herxheimer)

OVA『奪還者』に登場した、ヘルクスハイム伯の娘で亡命者。本名はマルガレータ・フォン・ヘルクスハイム。亡命後、グレーチェン・ヘルクスハイムを名乗るようになる(ことにした)。紫水晶の瞳と淡い金髪^{アメシスト}の、端正な顔立ちの女性。本稿では、一八歳。少尉としてルエヴェト星系のJL二七基地に赴任している。本編の主人公。



ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング

(Wenzel Heinrich von
Bending)



同じく『奪還者』で、最後にマルガレータを同盟へ亡命させる上での後見人として、彼女に同行した、伯爵家の三男坊。本稿では、統帥作戦本部情報部・対帝国情報課長を務めている。いつの間にか同盟軍中佐。

ティフリー・ブラントン

(Tiffany Branton)



同盟軍士官学校でのグレーチェンの同期生。クルーカットの髪型、頑丈な体つきの生真面目な若者。現在は

少尉として、グレーチェンとともにJL二七に勤務する。

シャルロッタ・ゼーダーシュトレーム

(Charlotte Soderström)



同盟軍士官学校でのグレーチェンの同期生。通称ロッティ・セーデル(Lotti Söder)。黒髪・黒瞳に素通し眼鏡の、グレーチェンよりも実年齢二歳年上、グレーチェンの親友。本編では第一艦隊に配属されている。

フランツペーター・ヨハンネス・バウアーシュミット

(Franzpete Johannes Bauerschmitt)

帝国宰相府付き宿直医で、国立オーディン文理科大学医学部准教授。^{コラゲネ・クランクハイト} 膠原病の専門研究者としての実績もあり、同時に臨床医としても優秀な経歴を持った若い医師。苗字がこともあろうにバウアーシュミットであるのは、筆者の趣味に属する。

ヒラーデ

(Joe Genuta Harada)

同盟軍大佐。JL二七駐留艦隊参謀長。アムリッツアで艦を失い、一人生き残ったために軍から冷遇され、その恨みから亡命者であるグレーチェンを偏執的に憎悪する。

コティ

(Alban Coty)

兵長。巡航艦『ベッドフォード』偵察員。本稿では伍長となり、旗艦『ハリスバーク』の下士官と

なっている。

テスニエ

(Marius Taisnier)

同盟軍大尉。ブラントンの直属上官。巡航艦『フィラデルフィア』航法士官。

モリナーリ

(Amedeo Gionatha Anastasio Emanuele Molinari)

同盟軍准将。JL二七基地司令官。ヒラーデに圧倒されて全く影の薄い司令官。

ルドニコフ

(Sidor Leonovich Rudnikov)

同盟軍准将。JL二七駐留艦隊司令官。影の薄さは、モリナーリと同じ。

ルーカス・フォン・レーリングガー

(Lucas von Röringer)

帝国軍少将。高速巡航艦隊を率いて、グレーチェンの指揮するJL二七駐留艦隊を追撃する。(漫画版銀英伝に名前だけ登場していたのを頂いた。

ヴィラルドワン

(Alphonse Villardouin)

同盟軍JL二七駐留艦隊旗艦『ハリスバーク』の電子戦士官で中尉。艦隊の脱出行で、グレーチェンを補佐する。